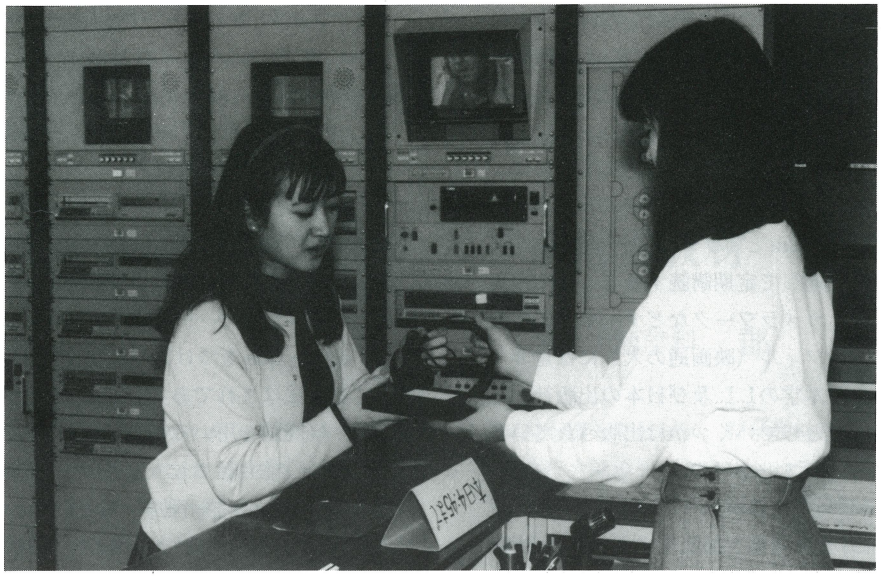
ISSN 0288－1594

AV JOURNAL

1990年3月 第17号



〈4階 テープ・ライブラリー〉

目　次

ビデオでフランス語を……第二部フランス語学科　大木　充…2
イタリア語のビデオ語学教材……イタリア語学科　郡　史郎…3
映像媒体語学教育事始・叙説……ポルトガル・ブラジル語学科　林田雅至…5
ビデオによる教育―その試行錯誤の記録―
……インド・パキスタン語学科　松村耕光…7
大林宣彦監督作品『北京的西瓜』を見て
……中国語学科非常勤講師　福家道信…9
〈ＬＬ便り　1〉衛星放送ワールド・ニュース録画、視聴サービスのお知らせ
……10
〈ＬＬ便り　2〉テープ・ライブラリー利用状況について……11
〈ＬＬ便り　3〉一般教養映像資料紹介……16
映像資料（レーザ・ディスク）所蔵一覧　その4……17
Guide for foreign users to Language Laboratory……19

大阪外国語大学

ビデオでフランス語を

第二部フランス語学科　大　木　　充

雑誌などでよく語学の達人が映画で外国語をものにしたと書いているのをみかける。語学教材用に制作されたビデオと異なり、自然な本物のフランス語に、しかもストーリーを楽しみながら接することができるのだから、生きたフランス語を習得するのには映画は理想的な語学の教材といえる。その映画が今や気軽に学校で、家庭で楽しめるのだから、そのビデオを語学の学習に用いない手はない。

映画のビデオを自習教材として用いる場合には、そのシナリオがあると便利だ。フランス語の場合、L'Avant-Scène Cinéma というシナリオの月刊誌がある。日本の書店を通して定期購読することができる。登場人物の動き、カメラワークなどすべて詳しく書いてあるのでシネフィル（映画通の人）には是非すすめたい。また、本学のL.L.及び日本の出版社からもすでに、教科書としていくつかは出版されているので、以下にそのリストを示す。

ルネ・クレマン：「太陽がいっぱい」；ジョゼ・ジョヴァンニ：「ブーメランのように」；（以上 大阪外大L.L.）；ジュリアン・デュヴィヴィエ：「ペペ・ル・モコ」；マルグリット・デュラス：「ヒロシマ・私の恋人」，「かくも長き不在」；レネ・クレール「悪魔の美しさ」；ルネ・クレマン：「禁じられた遊び」（以上 行人社）、「自由を我等に」（朝日出版社）；クロード・ピノトー：「ラ・ブーム」；コリーヌ・セロー：「赤ちゃんに乾杯！」；ジャック・ドゥミー「シェルブールの雨傘」（以上 白水社）；エリック・ロメール：「海辺のポーリーヌ」、「満月の夜」、「緑の光線」、「友だちの恋人」；フランソワ・トリュフォー：「突然炎のごとく」（以上 駿河台出版社）

これらのシナリオの大部分は本学のテープライブラリーでビデオとともに借りることができる。

さて、映画で用いられているのはたいていの場合フランス人が日常生活でごく普通に用いているフランス語である。それで、書かれたフランス語と次の点が異なっている。

1．neの省略

否定のne… pas（jamais, plus, que, etc.）のneは非常にしばしば省略される。

C'est pas ça.／On se verra plus.／J'en sais rien.

2．非人称のilの省略

Y'a de la place.／Faut pas s'inquiéter pour les gars.

3．tuのエリジョン

T'es sûre ?／T'as pas vu ?／Avec qui t'étais dans ta chambre ?

4．疑問文

a）疑問詞を用いない疑問文において、「疑問」は、かしこまった丁寧な会話でないかぎり、95%以上がイントネーションのみによって表され、est-ce queをつけたり、主語と動詞を倒置させる方法はまれである。

b）疑問詞を用いるさまざまな型の疑問文のなかで、日常会話でもっともよく用いられるのは、《疑問詞＋主語＋動詞（Quelle heure il est ?）》である。その次によく用いられるのは、《主語＋動詞＋疑問詞（Tu t'appelles comment ?）》である。主語と動詞を倒置させる《疑問詞＋動詞＋主語（Que dirait Sylvie ?）》は限られた場合にしか用いられない。

5．遊離構文

名詞句が主語となっている文は非常にまれであ

〈フランス語映像資料〉

る。そして、名詞句が主語になるのをさけるためのさまざまな構文があり、次のような遊離構文（転位構文）といわれる構文もそのひとつである。

Cette fille, elle est vraiment bizarre.／Il est fou, ce type !

また、このレベルのフランス語には発音に関して次のような特徴がある。

1．無音の〔ə〕の脱落

Il ne sort jamais le samedi.〔il-nə-sɔr-ʒa-mɛ-lø-sa-mø-di〕

2．〔l〕,〔r〕の脱落

Ce cartable est à moi.〔skar-ta-bɫe-ta-mwa〕

3．Je〔ʒə〕→〔ʃ〕

Je sais pas.〔ʃɛ-pa〕

話し言葉では、話しの間を整えるために、bon, eh bien, enfin といった「つなぎの言葉」が頻繁に用いられる。このような表現にも注意しておくと、会話するときにたいへん役に立つ。

最後に、たいていのフランス映画はルーカスやスピルバーグの映画のようにハラハラ、ドキドキさせてくれる活劇ではない。非日常的な出来事であざとく観客を楽しませてくれる映画ではない。スーパーマンでも完全無欠なヒーローでもないわたしたち自身の人生の面白さを教えてくれる映画である。そこでは、話の筋の展開だけでなく、アメリカ映画にはない登場人物の台詞の面白さを味わってください。

イタリア語のビデオ語学教材

イタリア語学科　郡　　史　郎

視聴覚ライブラリー所蔵のイタリア語・イタリア文化関連の映像ソフトとしては、映画やドキュメンタリー、そして旅行記・旅行案内の類があわせて100点ばかりある。私自身が所有している50時間ほどのイタリアのＴＶ番組の録画もある。授業ではこれらを目的に応じて適宜利用しているが、語学教育のために開発されたビデオ教材に秀逸なものがあるので、ここではこの教材の紹介を中心に、視聴覚ライブラリー所蔵のイタリア語のビデオ語学教材について述べる。

秀逸な教材とはBuongiorno Italia !(ItIt-6)。イギリスＢＢＣ放送局の初級用イタリア語テレビ番組をビデオ化したもので、ビデオテープ500分（20課各25分）からなる。並行して放送された同タイトルのラジオ番組もカセットテープ３巻に収められている。ビデオに収録されている映像はイタリア北部マッジョーレ湖畔の保養地Stresaと中部の小都市Orvieto、カセットのほうはOrvietoと北東部の中都市Vicenzaでのロケによるもので、旅行会話的な場面をおりこみつつ、そこでの様々な人の生活ぶりや旅行ガイド的情報がイタリア語によるインタビューとナレーションを通して紹介される。

体系的に文法を提示するわけでもないし、語学的解説もほとんどない。語学教材らしい点は、現地での旅行会話場面（文字化されテキストに収められている）に含まれる初級用の重要会話表現が、講師によるくりかえしを通じて直接法的に、したがってイタリア語だけを使って提示されることだけである。もっとも、文法が解説されていても教師としてはかえって迷惑だし用途も狭くなるので、むしろこれはありがたい。くりかえし提示される重要表現は精選されており、短く気が利いていて自然である。ただもう少し数が多くてもよい。旅行会話はロケ地で実際におこなったものなので、学習者もその会話を自ら体験しているような気になるようだ。ビデオ教材を使えば会話シミュレーションができそうだとは誰でも思いつくことであろうが、現実にはそれを実現するのはなかなか困難である。この教材はうまく旅行会話のシミュレーションソフトを可能にしている。

一方、ナレーション部分のイタリア語もやはり文字化されてテキストに収められているが、レベル的には中級以上のものである。したがって、ひとつの課の中にレベルがまったく異なるイタリア語が混在している。もうすこしやさしいナレーションであればと、初級用としてはやや不満ではあるが、中級クラスでも利用できるという点で非常に便利であるし、

なによりもやさしいナレーションではとても説明しきれないような良質の文化情報が含まれており、これを教師が解説するのを聞くだけでもじゅうぶん勉強になるだろう。私自身も学ぶところが大いにあった。映像自体も楽しく、「作品」と呼ぶべき風格さえもっている。すでに10年近く前の番組である（1982年出版）という点が気になるが、少々古くなっても価値を失わないと思う。

しかしながら、この Buongiorno Italia！という教材の最大の魅力は、映画や地誌情報ビデオとは違って、ふつうの人の現実のコミュニケーション場面や自然な生活場面が映像化されている点であると思う。教室での会話の授業などではお目にかかれない、なにげないしぐさや表情、他者への接しかた、自然なイントネーション、間のとりかた、つなぎことば、種々の間投表現等、イタリア人らしいコミュニケーションを構成する諸要素が観察できる。欲を言えば、そうした場面がもっとほしいところであるが、コミュニケーション教育の教材として理想にかなり近いのではないか。

ＢＢＣからはスペイン語、ドイツ語、フランス語ロシア語、ギリシャ語などのビデオ教材が出ており本学所蔵のものもあるが、こんな教材が他国語でもあるのならぜひそれを使って勉強してみたいと思わせるだけのものをこの Buongiorno Italia ！は持っている。本学で制作するビデオ教材のレベル向上のためにも、こうした教材がどのような作られ方をしているか研究する価値があると思う。

私はこの教材をおもに中級ＬＬ授業で使っているが、これを見て刺激を受けた学生がわざわざロケ地を訪れることもあるようだ。私自身も昨年ロケ地のひとつ Orvieto を訪れ、教材の映像をフォローして歩いたが、このような教材を作るためには周到な準備が必要であることがよくわかった。

〈イタリア語映像資料〉

Buongiorno Italia！は初級用の番組だが、これに続く中級用の番組としてL'Italia dal vivoがある。あいにくこれはラジオ番組なのでカセットテープ3巻（各巻60分）のみであるが、内容は非常に豊富で、やはり語学的にも文化的にも有用な情報がぎっしりつまっている。ミラノ、フィレンツェ、ベネツィアでのまとまった長さのインタビュー（ふつうの人の仕事、家族、思い出等々についての話）で構成され、ことばのやりとりはきわめて自然で言い間違いや言い淀みも少なくなく、はなしことば研究の資料としても貴重である。

Appuntamento in Italia（ItIt-18）もＢＢＣのビデオ教材（15分×５巻）であるが、こちらの方のできはいまひとつである。男女の対話によるナレーションで進行するドキュメンタリーで、イタリア各地の映像が収められている点貴重ではあるが、画面がいかにも古く、なによりもナレーションの内容がありきたりである。語学的には初期後期ないし中級に適当であろうが、内容的には日本のテレビ局制作のドキュメンタリーの方がずっとおもしろい。おそらくドキュメンタリー風の教材は、ナレーションの語学的なレベルにあまりこだわらない方がよいのだろう。

さいごにアメリカで出たJoy of talking：Italian（ItIt-19）を紹介しておこう。イタリア人ないしはイタリア系アメリカ人とおぼしき女性が教師役で旅行会話表現を紹介し、生徒役のアメリカ人女性がこれをときどき間違えながら、しかしものおじせずじっとカメラを見据えながらくりかえすという趣向のビデオである。テロップとともにこのふたりの女性が発音する場面が数秒おきに切り替わって映し出されるだけで、それがえんえん60分続く。タイトルから現実のコミュニケーション場面が少しくらいはあるのではと期待したのだが、甘かった。正直なところ、なぜわざわざこれをビデオ化したのか理解しかねるのであるが、学習者の立場からはモノトーンでしゃべっているだけでもやはり画面が同時に提示される方が臨場感があるのだろうかとか、音を聞くだけよりも勉強している気になるのだろうか、学習効果はどうだろうか、などとビデオ教材の本質について考えてしまう、不思議な、しかしそういう意味においては印象に残るビデオではある。

《映像媒体語学教育事始・叙説》

ポルトガル・ブラジル語学科　林　田　雅　至

僕自身の率直な意見としては、今正に映像時代でありながらJapaneseは映像に対する客観的な視点を持ち得ていないという意味では、そのことを前面に押し出して考えれば，Videoを介した語学教育については残念ながらまだまだ時期尚早の感は否めないであろう。

最近起きたインド航空機事故に際しては面白い現象が見られた。ＮＨＫでは事故現場の映像は従来と何等変わらず敷布を被せた所から始まっていたが、民放では生々しい凄惨な場面が視聴者の肺腑を抉った筈である。視覚的には≪血流漂杵（楯）≫の世界がそこには在り、聴覚的には喘ぎ呻く声がそこには聞えた。画面中央では担架に載せられて運搬される一糸まとぬ無残な屍体が、姦淫罪に苦悶し剣で両眼を抉出したOedipusの神々しい姿とは違って、invisibleな神の経綸の器の前に完膚なきまでに叩きのめされ屈服し、神に無言の呪詛の言葉を吐きかけながら、その醜悪な膨張した憐れな姿を仰向けにして両腕を天上に晒しているのである。

ＮＨＫではこの種の映像はJapaneseの脆弱な感性には受容されないとして、１次資料の形で報道する立場は取っていない。先般放送されたアルメニア地震災害の海外ドキュメント［嗚咽の聞える現場］にせよ、天安門事件後当局による暴動鎮圧の正当性をはかる政治教育映像［暴徒による人民解放軍兵卒の血の磔刑の場面］にせよ、いずれも直接的な報道ではない。それでも１歩前進には違いない。徒に興味本位の邪悪な好奇心を刺激するためだけの、コンテ

キスト抜きの屍体映像を編集したVideoが異常なほどに高い販売売上指数を示すことに如実に表われている現在の状況に組しない意味からも、特に事件等に関する編集・改悪されない映像に直面することによって、映像を客観的に観察する習慣は身につけていかなくてはならないだろう。

極論を言えば、良きにつけ悪しきにつけ、快楽なり喜びなりを与えるものとしてしか映像を認識しない鑑賞眼では映像を客体として、それはそれとして受け入れることは難しいのではないだろうか。僕自身の中でこうした疑問があって、論の飛躍があるかもしれないが、たとえ教育用映像であっても無意識裡にそのままに受け入れられないということが生じ、映像が伝えるべく持つ、言語のみの情報量を圧倒的に越える情報量を偏(かたよ)ることなく十二分に摂取出来ないのではないかと危惧するのである。

ただこの問題への執着と先行する危惧が論の展開の障害となっても仕方がないし、ここで述べている≪時期尚早の感≫は映像の視覚的な側面に限定したことでもあるので、後半は映像による語学教育に関して取り敢えずそれを是とした上で、より具体的な方法論の問題を扱うことにしてみたい。

例えば教材に映画を使用するとしてみよう。

教材としての映画について所与の条件がいろいろあるだろう。例えば字幕付きであるが、シナリオがないとか字幕はないが、シナリオはあるとかいったことである。加えて学習方法にも様々な方法論が想定出来ようが、今は話をやや単純化して1例として、字幕スーパーがなく、シナリオを副教材にする場合を考えてみよう。単に視覚的要素≪書かれた言葉≫と聴覚的要素≪話された言葉≫を分離しただけではなく、それぞれの要素を理解する際に最終的には聴覚的要素の速度で2者が1体となって理解されることになるのであるが、そこに至るまでの過程でそれぞれ分離した要素固有の異なった速度で理解が進行することにもなるであろう。［必ずしも断定は出来ないが］、≪書かれた言葉≫は≪書かれた言葉≫の速度でテキストを通して解釈が行なわれ、≪話された言葉≫は≪話された言葉≫の速度で反復練習によって把握作業が進められる。日本語を母語とするJapaneseにとっては日本語の《書き言葉》と《話し言葉≫のある程度の本質的な遊離［これは伝統的な≪書き言葉≫主体教育の弊害であるかもしれない］が前提としてある以上、この上記の、2つの要素の間を繰り返し往復する学習作業は手間隙のかかるものであろう。

この作業の前段階的な学習は存在しないものであろうか。素朴な疑問である。僕は思い切って日本映画を教材にすることを提言してみたいのである。字幕は例えばポルトガル語のそれを付けるのであるが、映画の内容理解に関しては苦もない筈である。≪話されている言葉（日本語）≫と同時進行の形で映像に現われては消えていく≪書かれている言葉（ポルトガル語）≫を理解していくというシステムである。これはJapaneseには有利な方法論であると思われる。進んだ階段では英・米映画を使用することも可能であろう。この場合には≪話されている言葉≫が英語であるから、そちらの方の理解もしなければならず一見すると大変な作業のようであるが、今度は逆に≪書かれている言葉（ポルトガル語）≫の理解が英語の聴覚的理解を助けるであろう。

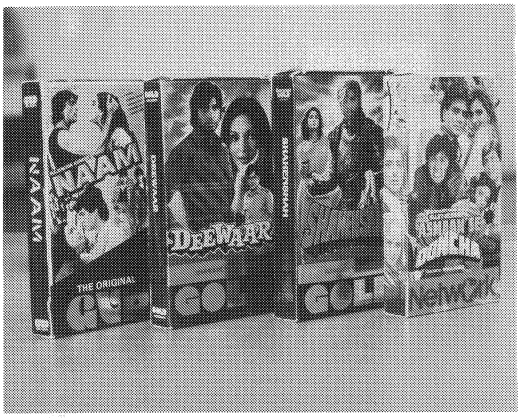
実際の所この方法論は何も僕のオリジナルな発案ではない。10年前ポルトガルに留学していた折、ポルトガルにおける放送界の財政上技術的な問題から外国映画・外国のニュースはすべてポルトガル語字幕スーパーであった当時の状況を踏まえて思いついたに過ぎないのである。Japaneseである僕にとって《聴覚のみによるcommunication》の前段階として非常に有益であったのを述懐する。興味深かったのは当時のポルトガルの識字率の低さ（70%内外）に端を発する社会問題として、地方都市で吹き替えなしの外国のニュースは理解されないということが社説を賑わし物議を醸したのである。RTP（ポルトガル国営テレビ）の職員の話によると、これは直接聞いたのであるが、吹き替えにはお金もかかり、技術も要るということであった。

閑話休題。提案したシステムを実行するには字幕を自前で付けたりしなければならず、何かと困難は伴なうであろうが、あるいはポルトガルで販売されていると想像される日本映画のポルトガル語の字幕付きVideoを購入するというのも1案であろうが、いずれにせよ効果の方は体験的にも保証できるので是非とも実現したいと思っている。この段階での訓練を積めば、ここで1例として挙げた方法論による2要素間の往復学習作業はより楽に行なえるであろうと僕は期待しているのである。

ビデオによる教育 ―その試行錯誤の記録―

インド・パキスタン語学科　松　村　耕　光

私がビデオ（そしてテープ）を使った授業を始めたのは2年前のことである。3・4年のウルドゥー文学の授業を二つ担当することとなり、その内の一つは現代小説を講読することにしたのであるが、残りの一つを何にするかあれこれと思案した……活字ばかりの授業では飽きてしまうし、活字では南アジアのあの世界の雰囲気は絶対に分らない。テープやビデオを使った授業が出来ないものか。活字、音声、映像の三位一体によってより良く南アジアの文化研究が出来るようになるのではないか……と考えたのが、ビデオ（そしてテープ）を使う授業を始めた動機である。



〈インド・パキスタン語映像資料〉

1988年度は、1年の前半をウルドゥーの古典恋愛詩の講読に当て、後半で有名なヒンディー語映画を教材として使った。ヒンディー語映画の基本テーマの一つは恋愛であり、古典詩の恋愛と現代ヒンデイー語映画の恋愛とを比較して、両者の連続性と非連続性を検討してみよう、というのが授業の目的であった。しかし、学生諸君は、そういう点に目を向ける前に、目から心臓のかけらや肝臓の断片が流れ出る、といった古典恋愛詩の奇矯な表現や、男女の恋愛感情が高まると必ず歌って踊り出すヒンデイー語映画のパターンに度肝を抜かれ、正気に戻るのに一年程かかったようである。その毒気たるや全く強烈、中には正気に戻らず、中毒症状を起こして翌年も授業をとった学生もいるくらいである。

1989年度では、前半でヒンディー語、ウルドゥー語の歌謡曲を研究し、後半で、ヒンディー語映画、ウルドゥー語映画、ベンガル語映画を観せた。インド、パキスタンの歌謡曲の大部分は映画の挿入歌であり、それらを研究することによって、インド、パキスタンの人々の基本的な感性、心性を探ってみよう、というのが1989年度の授業のねらいであった。

文化と言えば難解な文学や芸術しか頭に思い浮かばないのは、全く浅薄な文化理解としか言いようがないであろう。普通の人が普通に楽しんでいる娯楽文化の世界――これをインド、パキスタンのインテリは頭から馬鹿にしているが――を研究することの重要性は、いくら強調しても足りないぐらいである。まして、インド、パキスタンに於いては、普通の人が最も普通に享受している文化とは、歌謡曲であり、映画なのである。

インド人、パキスタン人の歌謡曲好き、映画好きは日本人の想像を絶するものがある。商店街は言うに及ばず、長距離バスの運ちゃんは歌謡曲のカセットをボリューム一杯にかけているし、映画館は昼間から満員である。パキスタンではパキスタン映画はあまり人気がなく、インドのヒンディー語映画が大人気で、パキスタンの首都イスラマバードを、バスがインド映画の挿入歌をボリューム一杯に鳴らして

走り回っている程である。ヒンディー語映画で使われているヒンディー語は、ウルドゥー語に近く、パキスタン人でも容易に理解出来るのである。このようにインドやパキスタンの文化の中で重要な位置を占める歌謡曲や映画に目を向けることなくして、彼の地の文化研究は十全たるものとはなり得ないのである。

ビデオを教材として用いる場合、一本の映画なら映画を一年かけてじっくり研究するのも一つの方法であろうが、私は出来るだけ多くの映画を観せることにしている。精密な理解よりも、まず大体のイメージを学生に持たせようと思っているからである。十分な理解は難しいにしても、数多くの映画を観ることによって、あの強烈にして痛快なインド娯楽映画のさまざまなパターンが理解出来るようになるし、そして、その彼方にインド文化の根底を覗き見ることが出来るようになるかもしれないからである。

それにしても心配なのは、ビデオを教材とした私の授業を2年連続してとり、そして卒業してゆく彼らのことである。一体彼らはインド映画なしに、これから禁断症状を起こさずに生きてゆけるのだろうか？

〈インド・パキスタン語映画シナリオ〉

〈中国語映像資料〉

大林宣彦監督作品『北京的西瓜』を見て

中国語学科非常勤講師　福　家　道　信

勤め先の大学の入試事務も終り、学年末試験も終り、外大の授業も終って、2月の下旬にしばらくぶりで映画を見に行った。作品は大林宣彦の『北京的西瓜』題名からすればれっきとした中国語の題であるから、一見、中国映画のようだが、そうではなくて実は日本映画。もっとも、作品中には多勢の中国人留学生や、中国の現役の若手俳優も登場している。本来は、日本と中国との両方の土地でロケを行なって製作する予定だったものが、昨年6月4日の天安門事件の影響をこうむり、中国ロケが行なえないまま、とにかく作品化された。いわくつきの映画ということになろう。

話の筋は、数年前に千葉県の船橋市の八百屋の店主と近所に住む中国人留学生との間に進行した、全く庶民的なレベルでの日本と中国の友好の実話にもとづくもので、一種の美談といってよいだろう。船橋市の「八百春」という八百屋の店頭に、変な青年が現われて野菜をしげしげと一つずつ眺めるが、いっこうに買おうとしない。不思議に思って店主が話しかけると、実はその青年は中国人留学生で、日本はあまりに物価が高く、自分たちのぎりぎりにきりつめた生活費では、ろくに新鮮な野菜すら食べられないのだという。店主と青年とのこの出会いは、やがて、店主の善意と中国人留学生たちの生活条件からする必要性とによって、ぐんぐん発展して、最初の1対1の関係があっというまもなく1対多数の関係となる。「八百春」の店主は、留学生たちに対しては、野菜を仕入れ原価以下で売り、病気の際は面倒をみてやり、商売用のバンを使って彼らを東京見物に案内し、また帰国者来日者のために空港まで送迎に出向き、海水浴、花見に彼らをさそい、正月には自宅に招いて日本の正月を体験させる。彼の善意は、周囲の人々からは、あれは一種の病気のようなもので「中国熱」なのだと称される一方、留学生たちからは、まだそんな年令でもないのに、日本の「お父さん」と呼ばれるようになる。しかし、日本に来た中国人留学生が直面する問題は、個人が横から援助の手を差し伸べようにも、その方法がないといった側面がある。端的にいって、彼らはすでに紹介したように、日本の減茶苦茶な物価高に困りはてている。援助を求めてくる相手に身銭を切って対応することを続ければ、先行きはどうなるか、自身の生活の崩壊しかないだろう。一般の人間は決してそんなことはしない。だが、「八百春」の店主は、その崩壊の一歩手前まで行ってしまうのだ。留学生寮に入れない青年のためにアパートさがしを手伝ううちに、留学生の予算ではどうにもならないので、金銭面でも彼らのために一肌ぬがずばなるまいかと彼は思い、実行する。それ以後、彼の善意は、いうなればそれの分量に応じて、家族の生活にも、店の経営にも、もろにマイナスの影響を及ぼしてゆくことになる。家族にしてみれば、全く、悪すぎる冗談であろう。

主人が留学生のことに夢中になって、店の仕事をほおりっぱなしにする「八百春」の店からは、長年、店を手伝ってきた元気のいい若い店員の姿が消え、仕入れと配達のためのバンもなくなり、やがて、税金未納によって税務署に店を差押えられ、八百屋の鑑札も取り消されてしまう。それに追い打ちをかけるようにして主人は心労で病気になって入院してしまう。もう店を売り払うしか方法がないという状況となるわけだが、この窮状に気付いた留学生たちは、この時こそこれまでの恩返しとばかりに、多勢で店にやってきて、それぞれ仕事を分担し、創意と工夫をこらして店の商売をたてなおす。さらに、「八百春」の店先が以前どおりに回復してさらに何年かすぎ、最初の頃の留学生たちが本国に帰って行った後、ある日、とつぜん国際電話がかかり、かつての留学生仲間が全員で「八百春」の夫婦を中国に招待したいという話が舞い込む。

映画のあらすじは、簡単にいうとこのようなもので、先に書いたように、やはり、文字どおり、一種の美談というべきものだろう。実際、これは大変なことだ。しかし、この美談によって同時に提示されているのは、一人の庶民が横で見るに見かねてほとんど自殺行為にも等しいような援助に身をのりださ

ざるを得なくなるような、留学生たちの日本での生活の困難さであり、この問題に対する公的なケアが欠如している実情の深刻さであろう。私自身、この数年間、勤め先の大学で留学生問題に関連した仕事を手伝わざるを得ない状態がつづいているが、身元保証人の問題、奨学金の問題、アルバイトの問題、住居の問題、彼らの日本語能力に関する正確な評価と適切な学習のシステムの問題等々、ともかく容易には解決しがたいような問題が集中しているように思う。

作品全体のできばえについて正直に感想を言うと、こうしたあらすじと素材の性格からして、2時間余りという篇幅はやや長すぎるのではないかという感じをもったが、それにしても、この映画は素材の含んでいる一種の深刻さにもかかわらず、修好、明るく、何かゴタゴタとしてにぎやかで元気旺盛な庶民的ふんいきがみちあふれているようで、この感じがとても良い。「八百春」の主人の人情味は、いかにも寅サンのシリーズを連想させるが、不思議と型にはまっている感じがしなかった。主人役のベンガルや、その妻の役のもたいまさこ——タンスにゴンのCMに出ていた——の演技らしさを何か捨象してしまったような演技が、多分、地味で渋いのであろうし、従来一般の映画らしい要素を極力排除したという大林監督の映画づくりの感覚がやはり良いのだろう。パンフレットに大林監督は、戦後40年余り平和の続いた日本には作品化すべき劇的なものは一見なさそうだが果たしてそうかという意味のことを書いている。そう、画面の船橋市のごった煮のようなベッドタウンの町並みを見ていると、実際、劇的な事は、正に現在連中だという気がする。誰が日本をこんなふうにしてしまったのか。映画や小説で作品化すべき素材は、まだまだいっぱいあるのだ。

天安門事件のこの作品に及ぼした影響を最後に紹介したいがもう紙幅が尽きた。興味のある方は機会をみて実際に映画で確認されたし。『北京的西瓜』という題名にも、恐らくそれは反映されているので。

〈LL便り 1〉 《衛星放送ワールド・ニュース録画、視聴サービスのお知らせ》

視聴覚資料係では、'89年10月1日より、海外放送、衛星放送の送出、視聴サービスに加えてワールド・ニュース等（表①参照）の録画、視聴サービスを開始しました。ほとんどのニュース番組が二カ国語で放送されています。語学学習に非常に効果的ですので、大いに利用して下さい。

表①

（月～金）

① 英「ＢＢＣニュース」
② フィリピン「ch7ニュース」
③ ソ連ＳＳＳＲ「ブレーミア」
④ 東ドイツ「ＤＤＲＦ」
⑤ 西ドイツ「ＺＤＦ」
⑥ 米「ＡＢＣワールド・ニュース・トゥナイト」
⑦ 仏「A-2ニュース」
⑧ 英「ＩＴＮニュース」
⑨ 米「ＣＣＮニュース」

（火～金）

⑩ アジア情報

（土）

⑪ ウィークリー・アジア

〈LL便り 2〉　テープ・ライブラリー利用状況について

（1988年４月～1990年２月）

今回は、'88年度（'88.4～'89.2）、'89年度（'89.4～'90.2）の２年の利用状況を比較しながら、各種の統計表を作成しました。

まず、映像資料（ビデオ・ＬＤ）の利用状況ですが、利用者数は年々増加の傾向にあり、この２年間を比較しても（グラフ①）、殆どの月で増加し、年間を通じて1000人以上の増加があり、トータルで8202人（但し、２人以上で利用しても１人の計算）の利用になりました。

次に、利用回数の多かった資料を紹介します（表③参照）。例年は、映画資料の利用が殆ど上位をしめるのですが、今年は、英語（上級）の教材として使われた「ワールド・ニュース」が一番多く利用されました。その他の資料では、「ローマの休日」、「カサブランカ」、「第三の男」などの不朽の名作が毎年利用回数の上位をしめています。

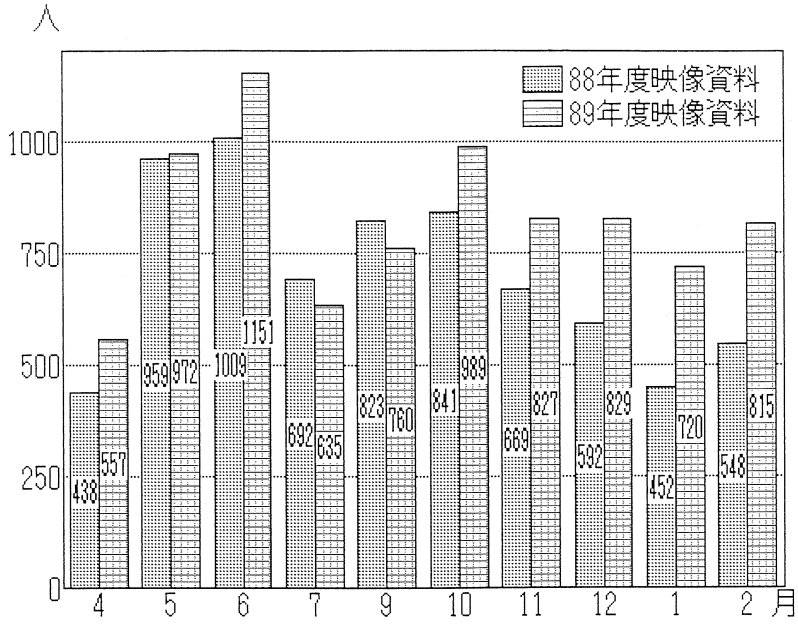
音声資料（カセット・テープ）の利用者数は、２カ年を比較して2000人強増加しています（グラフ②参照）。まず、グラフを見て気づくのが、７月、12月の利用が非常に高いことです。これは、多くの語学科で夏期、冬期休暇に音声資料を自習課題の教材としてあるためです。利用の多い音声資料も、殆どが授業用の教材が、上位をしめています（表④参照）。

最後に、映像資料、音声資料各語学科別の利用者数の比較（グラフ⑤、⑥）、'89年度の語学科別資料形態別統計を紹介します（グラフ⑦）。語学科別にみますと、３分の２の語学科で利用の増加をみています。そして、資料の形態別にみますと、各語学科千差万別の結果が出ています。

視聴覚資料係では、映像資料視聴施設として、３階自習ブース（18ブース、42席）、５階自習室（２グループ席）がありますが、映像資料の利用につきましては、大学休暇日以外は満席の状態が多く、利用者の皆様には迷惑をかけています。ブース数等の施施面から考えますと、'89年度の利用者数の8000人強が利用者数の上限のように考えられます。今後の重要な課題としては、施設、設備の充実を計るべく関係各位の協力のもとに積極的に努力していかねばならないと思っています。

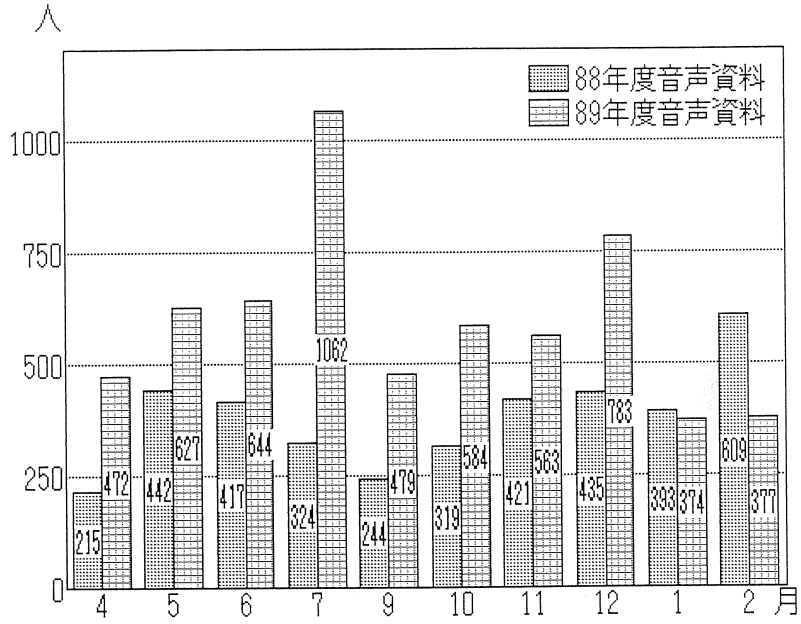
〈３階 ビデオ自習室〉

① '88、'89年度映像資料月別利用者数



	'88年度	'89年度
4月	438	557
5月	959	972
6月	1,009	1,151
7月	692	635
9月	823	760
10月	841	989
11月	669	827
12月	592	829
1月	452	720
2月	548	762
合計	7,023	8,202

② '88、'89年度音声資料月別利用者数



	'88年度	'89年度
4月	215	472
5月	442	627
6月	417	644
7月	324	1,062
9月	244	479
10月	319	584
11月	421	563
12月	435	783
1月	393	374
2月	609	377
合計	3,819	5,965

表③ '88、'89年度映像資料利用ベスト10

(授→授業で使用したもの)

'88 年 度	利用回数	'89 年 度	利用回数
1．貧街 授	116	1．ワールド・ニュース 授	165
2．蜘蛛女のキス	95	2．シャーロック・ホームズの冒険	111
3．ローマの休日	92	3．ローマの休日	109
4．卒業	76	4．バック・トゥ・ザ・フューチャー	100
5．マイ・フェア・レディ	69	5．カサブランカ	80
6．カサブランカ	68	6．愛と青春の旅立ち	79
7．愛と青春の旅立ち	67	7．華麗なるギャッビー	67
8．赤い服の少女 授	62	8．第三の男	65
9．誰がために鐘は鳴る	54	9．刑事コロンボ	64
10．第三の男	53	10．卒業	63

表④ '88、'89年度音声資料利用ベスト10

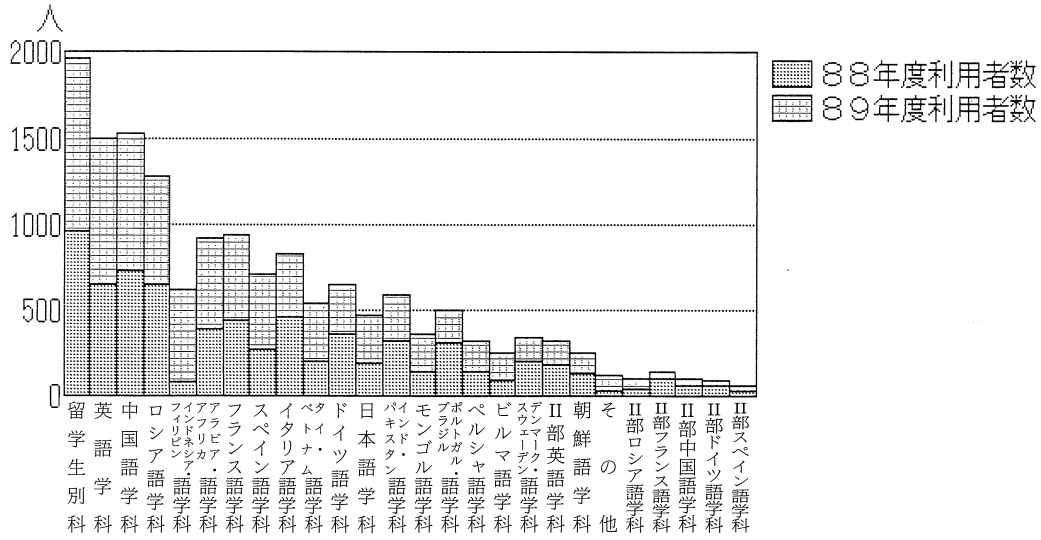
(授→授業で使用したもの)

'88 年 度	利用回数	'89 年 度	利用回数
1．Japanese for today 授	232	1．Basic spoken French ; elementary Course 授	452
2．Ta'llam al-Arabiya 授	121	2．Basic spoken French ; biginner's course 授	244
3．Basic spoken French ; elementary course 授	104	3．Japanese for today 授	236
4．英語会話（NHKラジオ）	43	4．Deutsch 2000 授	207
5．Whaddaya say ? 授	42	5．百万人のロシア語	68
6．百万人のロシア語	29	6．Ta'llam al-Arabiya 授	41
7．米語中級コース	26	7．米語中級コース	32
8．英検1級 カセットブックス	23	8．English Journal 89/11	31
9．米語上級コース	19	9．Intensive course in Japanese ; intermediate	24
10．ドイツ語講座（NHKラジオ）	17	10．英検1級 カセットブックス	22

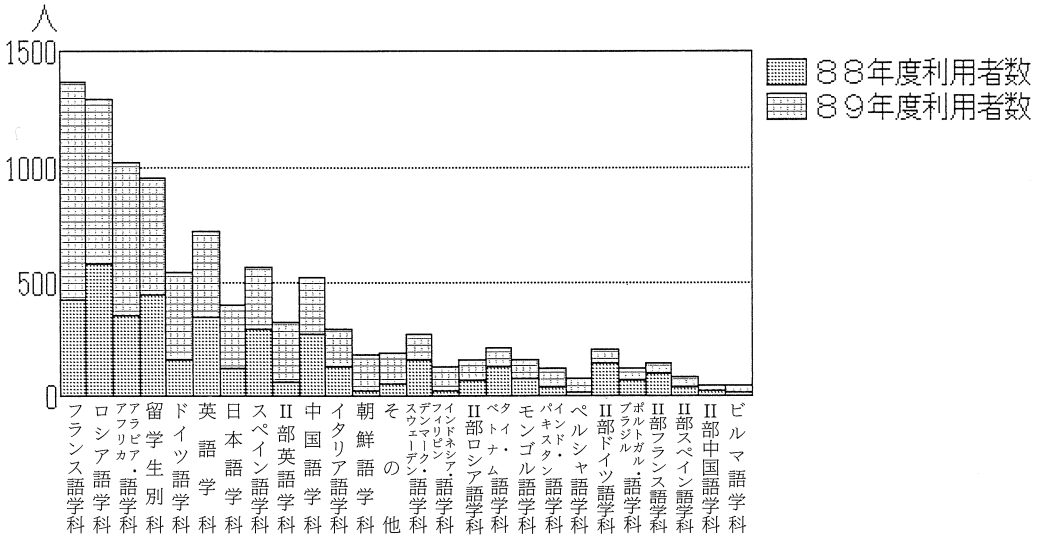
'88、'89年度L.L.テープ・ライブラリー開館日数

年度＼月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	合計
'88	14	19	22	21	20	20	16	17	15	18	13	195
'89	15	20	22	20	20	20	17	16	17	19	11	197

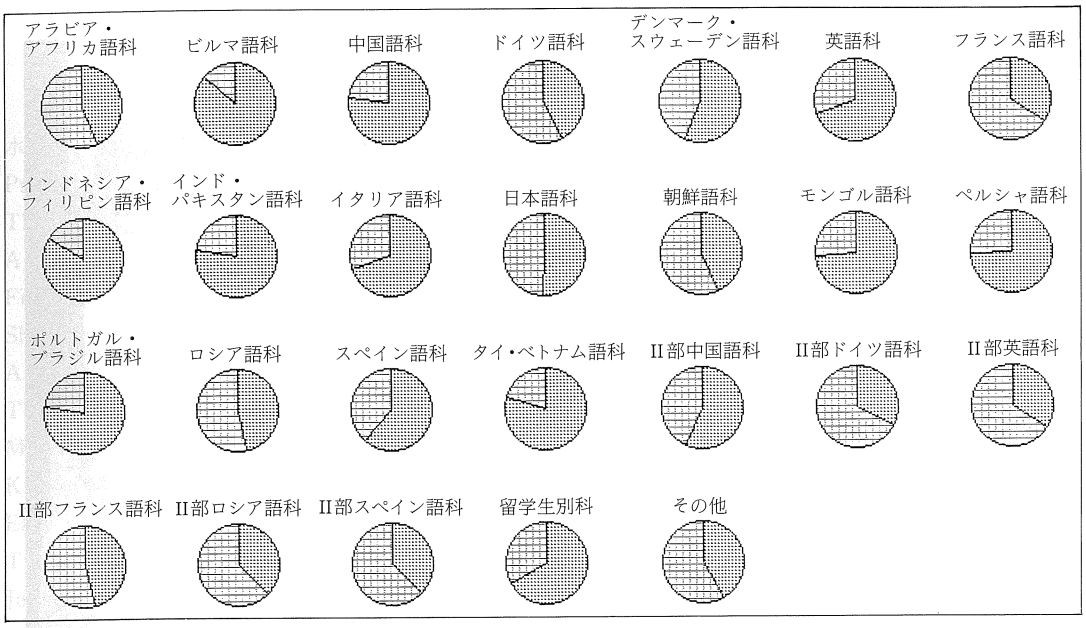
⑤ '88、'89年度映像資料語学科別利用者数

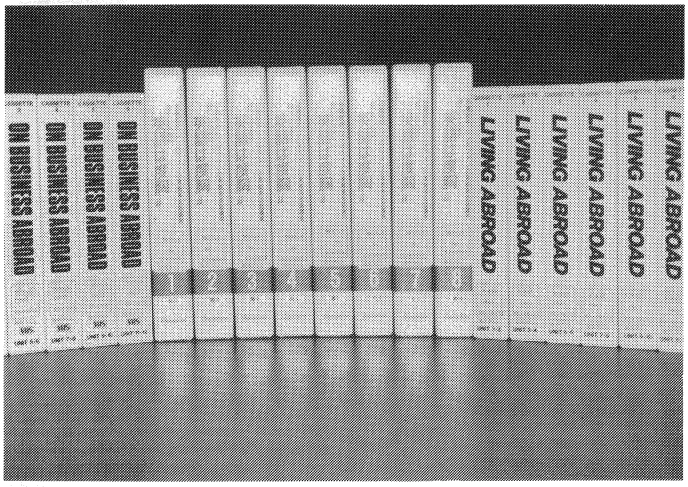


⑥ '88、'89年度音声資料語学科別利用者数



⑦ '89年度語科別・資料形態別統計





〈一般教養映像資料〉

〈LL便り 3〉　《一般教養映像資料紹介》

今回は、映画、音楽の映像資料に比べて利用の少ない一般教養の映像資料の中から各国の文化、会話、スポーツ等の資料の一部を紹介します。

（日本）

日本語教育映画　1－35	etc.
Japan today,　1－20	50分
海外子女のための日本語教材（16本）	各25分
Face of Japan,　1－13	各30分
日本語の教え方　1－5	各25分
日本語の授業の実際　1－10	etc.
ＮＨＫ日本語講座　1－10	各30分
驚意の世界－人体－　1－6	各50分

（中国）

中国の食文化　1－5	各25分

（韓国）

オリンピックハングル集中セミナー 1－8	各30分

（ヨーロッパ）

地球の歩き方－ヨーロッパー	50分

（英米）

On business abroad,　1－12	各25分
Living abroad,　1－12	各25分
英語は度胸　1－18	各20分
Video English,　1－8	各30分
San Francisco, a visual toor of the city by the bay.	20分
地上最強の英語－これがディベードだ－	120分
英語についての９章	各45分
People you meet,　1，2，4－7	各20分
サバイバルイングリッシュービデオで視るニューヨーク－　1－2	各22分

（フランス）

目で見るフランス語発音入門　1－3	各22分

（イタリア）

Buongiorno Italia,　1－20	各25分
Vedere e capire Firenze	60分
Apputamento in Italia,　1－5	各15分
Joy of talking Italian	60分

〈一般教養映像資料〉

（世界）

世界民族音楽大系　1－16	etc.

（スポーツ）

躍動美・アクロ体操	40分
平川仁彦のスキー上達講座	30分
世界のスキー	50分
Super sking	30分
技能テストのポイント（スキー）	90分
競技能力向上のためのウェイト・トレーニング・シリーズ	etc.
Chanpionship softball pitching	35分
Joe Weider's Mr. Olympia	85分
スキーは右脳で上達する	60分
ゲオルグの上級スキー決定版	30分

（言語学）

音声学　上・下	210分
Calling the tune	25分

映像資料（レーザー・ディスク）所蔵一覧

その4　　（1990年3月現在）

資料名	音声	所要時間	資料番号
水滸伝	（中国語）	1′30″	C-0012
Project A（プロジェクトA）	〃	1′45″	C-0013
The police story（ポリス・ストーリー　香港国際警察）	〃	1′46″	C-0077
A Chinese ghost story（チャイニーズ・ゴースト・ストーリー）	〃	1′36″	C-0078
Fire dragon（ファイヤー・ドラゴン）	〃	1′27″	C-0081
Shanghai blues（上海ブルース）	〃	1′43″	C-0082
A better tommorow II（男たちの挽歌 II）	〃	1′44″	C-0083
The sound of music（サウンド・オブ・ミュージック）	（英語）	2′52″	E-0062
My fair lady（マイ・フェア・レディ）	〃	2′52″	E-0072
Kiss of the spider woman（蜘蛛女のキス）	〃	2′00″	E-0303
Easy rider（イージー・ライダー）	〃	1′43″	E-0336
Twilight zone（トワイライトゾーン）	〃	1′35″	E-0341
Jagged edge（白と黒のナイフ）	〃	1′49″	E-0350
La femme d'a cote（隣の女）	〃	1′46″	E-0031
La peau douce / l' amour a vingt aus（柔らかい肌・二十歳の恋）	（フランス語）	2′28″	F-0093
L'une chante l'autre pas（歌う女歌わない女）	〃	1′46″	F-0094
Les enfants terrible（恐るべき子供たち）	〃	1′45″	F-0095
Les deux anglaises et le continent（恋のエチュード）	〃	2′13″	F-0096
Last tango in Paris（ラストタンゴ・イン・パリ）	〃	2′04″	F-0105
37.2° le matin（ベティー・ブルー）	〃	2′01″	F-0119
Escalier C（C階段）	〃	1′37″	F-0120
Ο Θιασοσ（旅芸人の記録）	（ギリシア語）	3′52″	G-0002
Taxidi sta Kitrhira（シテール島への船出）	〃	2′20″	G-0004
Nostalgia（ノスタルジア）	（イタリア語）	2′06″	IT-0025
Il bidone（崖）	〃	1′31″	IT-0026
Estate violenta（激しい季節）	〃	1′38″	IT-0027
La ragazza con la valigia（鞄を持った女）	〃	2′02″	IT-0028
Edipo re（アポロンの地獄）	〃	1′46″	IT-0029
Il vangelo secondo Matteo（奇跡の丘）	〃	2′17″	IT-0030
Il futuro e donna（未来は女のものである）	〃	1′41″	IT-0031
Rocco e i suoi fratelli（若者のすべて）	〃	2′56″	IT-0032
La bohem（ボエーム　ー歌劇ー）	〃	2′03″	IT-0033
Francesca da Rimini（フランチェスカ・ダ・リミニ　ー歌劇ー）	〃	2′28″	IT-0034
Kaos（カオス・シチリア物語）	〃	3′07″	IT-0044
Boccaccio 70（ボッカチオ 70）	〃	3′24″	IT-0050
Le notti bianche（白夜）	〃	1′47″	IT-0051
I vitelloni（青春群像）	〃	1′48″	IT-0052

資　　料　　名	音　声	所要時間	資料番号
Giulietta degli spiriti（魂のジュリエッタ）	（イタリア語）	2′16″	IT-0053
I clowns（フェリーノの道化師）	〃	1′31″	IT-0054
Media（王女メディア）	〃	1′51″	IT-0055
La ragazza di Bube（ブーベの恋人）	〃	1′51″	IT-0056
Secco e Vanzetti（死刑台のメロディ）	〃	2′05″	IT-0057
L'oaumo di pagilia（わらの男）	〃	1′48″	IT-0061
生きる	（日　本　語）	2′33″	J-0103
椿三十朗	〃	1′36″	J-0120
用心棒	〃	1′50″	J-0121
羅生門	〃	1′27″	J-0122
クラック！、木を植えた男（アニメ）	〃	1′25″	J-0123
Solaris（惑星ソラリス）	（ロ シ ア 語）	2′45″	R-0018
Неоконченная пьеса для механическото пианино（機械じかけのピアノのための未完成の戯曲）	〃	1′41″	R-0026
El sur（エル・スール）	（スペイン語）	1′35″	S-0012
Maece pan y vino（汚れなき悪戯）	〃	1′31″	S-0013
L'exil de Gardel（タンゴ・ガルデルの亡命）	〃	2′02″	S-0015
Smultronstallet（野いちご）	（スウェーデン語）	1′29″	Swed-0005
Ansiket（魔術師）	〃	1′40″	Swed-0006
Nattvardsgasterna（冬の光）	〃	1′22″	Swed-0007
Tystnaden（沈黙）	〃	1′35″	Swed-0008
Sommarren med Monica（不良少女モニカ）	〃	1′32″	Swed-0009
Sommarnattens leende（夏の夜は三たび微笑む）	〃	1′49″	Swed-0010
Jungfrukallan（処女の泉）	〃	1′28″	Swed-0011
Offret (Sacrificatio)（サクリファイス）	〃	2′29″	Swed-0012
Fanny och Alexander（ファニーとアレクサンデル）	〃	5′10″	Swed-0013

〈レーザー・ディスク資料〉

Cuide for foreign users to Language Laboratory

Services and facilities:

The Language Laboratory (LL) provides professors with services on language education using audio-visual media. The staff persons are available to assist professors in using the equipment of the laboratory and in producing instructional materials such as audio and video recordings, slides and overhead projection transparencies. Equipment and facilities for duplicating and editing audio and video tapes are also available.

The laboratory has a collection of instructional materials in 60 languages. The collection includes slides, audio tapes, video tapes (movies and documentary films) and textbooks. For detail, see our catalogs.

Overseas TV transmissions from USA (AFRTS), USSR, China as well as domestic TV programs are receivable.

Office hours: (The laboratory is closed on university holidays.)

Monday / Wednesday / Friday : 9:30 AM - 7:45 PM
Tuesday / Thursday : 9:30 AM - 4:45 PM

Staff:(Jan. 1990):

Ms. Ito, T. (Head) (伊藤)
Mr. Aoyama, I. (青山)
Mr. Nakasone, M. (仲宗根), Ms. Maejima, T. (前島),
Ms. Manabe, A. (真鍋)

Rooms and equipment of the laboratory:

All student booths are equipped with an audio tape player and a TV monitor. All booths in Room 5-II are also equipped with a video tape recorder/player.

Most video tape players in the laboratory are for NTSC signal (for Japan, USA). Video tape players for PAL/SECAM signal (for most European countries) are equipped in some rooms or available upon request. Note that for PAL/SECAM signal an appropriate TV monitor is required.

Overhead projectors and slide projectors are available upon request.

Classrooms with booths for student: (ＬＬ教室)

	capacity	equipment
4 - I	45 booths	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC)
4 - II	32 booths	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC)
5 - I	44 booths	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC)
5 - II	32 booths	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC), Beta (NTSC)

Classrooms equipped with audio and video tape players:
（ビデオルーム）

3rd floor	36 chairs	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC), Beta(NTSC), U-matic(PAL/SECAM), VHS(PAL/SECAM), Beta(PAL/SECAM), Laser disc player
Building D	90 seats	Audio tape players, U-matic (NTSC), VHS (NTSC), Beta (NTSC), Laser disc player
Auditorium (Theater) ＡＶホール	176 seats	Audio tape player, U-matic(NTSC), VHS(NTSC), Beta (NTSC), Laser disc players, Film projector(16mm), Slide projector

Conference room: （デシジョンルーム）

	17 seats	Simultaneous translation supporting system, Booths for translators, VHS (PAL)

編集後記

◇ Audio Visual Journal第17号をお届けします。今号は、ここ数年来、授業用教材、自習用教材として非常に多く利用されるようになりました映像資料の特集号です。

◇ 昨年度の利用状況は、映像資料、音声資料とも過去最高の利用でした。利用の増加と共に利用マナーの悪さが目立ちますので、他の利用者の迷惑にならないよう利用して下さい。

◇ 4月より、ビデオ信号変換装置（Pal・Secam →NTSC）の利用が可能になります。

◇ 次号の発行は6月の予定です。

ＡＶ Journal —第17号—

1990年3月27日発行

編集　大阪外国語大学視聴覚教室委員会
　　附属図書館視聴覚資料係
発行　大阪外国語大学
印刷　㈱ムラタ印刷